神代の始まりの事

1日域・秋津島ともに日本の意味。2『日本書紀』によると、天地開闢とともに現れた神。以下、伊弉諾尊・伊弉冉尊まで、高天原に住んだといわれる十一柱七代の神々およびそれらの神々の時代を天神七代という。国常立尊、国狭槌尊、豊斟渟尊、泥土煮尊・沙土煮尊、（以下、一対二神で一代）大戸之道尊・大苫辺尊、面足尊・惶根尊、伊弉諾尊・伊弉冉尊。伊弉諾尊・伊弉冉尊は、天神七代の最後の神として、国土と諸神を生んだという。3天照大神、天忍穂耳尊、瓊瓊杵尊、彦火々出見尊、鸕鷀草葺不合尊の五柱の神々およびそれらの神々の時代を地神五代といい、天神七代と人皇の間に位置する。4第一代天皇。5底本「みこと」。他本により改める。6一天下の君主。7真名本に、「国土を治め給ふに二つの道あり。即ち文武の二道これなり」。『平治物語』上・信頼信西不快の事にも類似表現がある。ただし、底本をそのまま訳すと、国を滅ぼし民を恐れさせる計略は文武二道である、となる。8学問や芸術を好む人々。9勇猛で武勇に秀でた人々。10唐朝第二代皇帝。11漢朝初代皇帝。劉邦。12第五十六代清和天皇の皇子貞純親王から源氏が分かれた。後胤は子孫。13第五十代桓武天皇の皇孫高望王から平氏が分かれた。累代は代を重ねること。14底本「皇子」。他本により改める。15合戦のさまを表す。

曽我物語　巻第一

神代の始まりの事

それ日域秋津島は、これ国常立尊より事おこり、泥土煮・沙土煮、男神・女神とあらはれ、伊弉諾・伊弉冉尊まで、以上天神七代にてわたらせ給ひき。又、天照大神より、彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊まで、以上地神五代にて、多くの星霜を送り給ふ。しかるに、神武天皇と申し奉るは、葺不合の御子にて、一天の主、百皇にもはじめとして、天下を治め給ひしよりこのかた、国土を傾け、万民の怖るる謀、文武二道にしくはなし。好文の輩を寵愛せられずは、誰か万機の政を助けん。又は、勇敢の輩を抽賞せられずは、いかでか四海の乱れを鎮めん。かるが故に、唐の太宗文皇帝は、傷を吸ひて戦士を賞じ、漢の高祖は、三尺の剣を帯して諸侯を制し給ひき。然る間、本朝にも、中頃より、源平両氏を定めをかれしよりこのかた、武略をふるひ、朝家を守護し、互ひに名将の名をあらはし、諸国の狼藉を鎮め、すでに四百余回の年月を送り畢んぬ。これ清和の後胤、又桓武の累代なり。然りといへども、皇氏を出でて、人臣に連なり、鏃を噛み、鋒先を争ふ心ざし、とりどりなりとかや。

1 惟喬・惟仁ともに、第五十五代文徳天皇の皇子であるが、弟の惟仁親王が清和天皇として皇位に即いた。二人の皇子が皇位を争ったことは、『平家物語』八・名虎にも見える。 2 文徳天皇の異称。 3 藤原良房。その女は文徳天皇の皇后明子。良房の住居は染殿と呼ばれた。 4 放っておけない。無視できない。 5 『平家物語』に「守文継体の器量」とあり、従うべきか。創始者は武を以て国を興し、継承者は文を以て国を治めることから。 6 真名本に、「万機無双の人相御在す」、『平家物語』に「万機輔佐の臣相あり」とある。『平家物語』に従うならば、天下の政務を助ける臣下がいる、となる。 7 天皇の位の尊称。 8 古活字本同。太山寺本には、「唇を返すべし。須く競馬に乗せ、その勝負によつて御位を譲り奉るべしとて」とある。なお、真名本や『平家物語』では、競馬と相撲の勝負で決めたとする。 9 八五八年。 10 京都市上京区北野天満宮の東南にあった右近衛府の馬場。 11 天皇や親王を守護するために祈祷する僧。御持僧。 12 巡察弾正紀御園の子。弘法大師空海の弟子。 13 教王護国寺。京都市南区にあり、真言弘伝の道場として重んぜられた。その管主を長者と称した。 14 比叡山延暦寺を指す。 15 円澄・円仁（慈覚大師）の弟子。 16 比叡山三塔の一つ。恵亮は西塔院主。 17 大威徳明王を本尊として行う怨敵退散の真言密教の修法。大威徳は五大明王の一つ。六面・六臂・六足で、剣鉾・輪・杵を持ち、憤怒の形相で大白牛に乗る。 18 中国の天台山に擬して、本朝の比叡山をいう。 19 修法の道場。 20 絶え間なく続くさま。 21 呪物としての土製の牛。大威徳の乗る牛の意もあるか。 22 一心不乱に。 23 独古杵の略。密教における修法の用具の一つ。もとはインド古代の武器、金剛杵。 24 脳。脳髄。 25 芥子の種子。護摩を焚くのに用いる。

惟喬・惟仁の位争ひの事

そもそも、源氏といつぱ、桓武天王より四代目の皇子を田村帝と申しけり。これに皇子二人おはします。第一を惟喬親王と申す。帝殊に御心ざしに思し召して、東宮にも立て、御位を譲り奉らばやと思し召されけり。第二の御子をば、惟仁親王と申しき。未だ幼くおはします。御母は染殿の関白忠仁公の御女なりければ、一門の公卿、卿相雲客たち、寵愛し奉られければ、これも又、もだしがたく思し召されける。かれは継体あひ文の器量なり。これは、万機ふいの臣相なり。これを背きて、宝祚を授くるものならば、用捨私ありて、臣下唇を翻すによりて、御位を譲り奉るべしとて、天安二年三月二日に、二人の御子たちを引き具し奉り、右近の馬場へ行幸なる。月卿雲客、花の袂を重ね、玉の裙を連ね、右近の馬場へ供奉せらる。この事、希代の勝事、天下の不思議と見えし。御子たちも、東宮の浮沈、これにありと見えし。

されば、さまざまの御祈りどもありけり。惟喬の御祈りの師にて、柿本紀僧正真済とて、東寺の長者、弘法大師の御弟子なり。惟仁親王の御祈りの師には、我が山の住侶に、恵亮和尚とて、慈覚大師の御弟子にて、めでたき上人にてぞわたらせ給ひける。西塔の平等坊にて、大威徳の法をぞ行ひける。

1 2 すでに競馬は、十番を際に定められ、六番勝ち給ふ御方に、位を御譲りあるべきとの御事なり。されば、惟喬の御方に、続けて四番勝ち給ひけり。惟仁の御方へ心を寄せ奉る人々は、汗を握り、心を砕きて、祈念せられけり。惟仁の御方、右近の馬場より天台山平等坊の壇所へ、御使ひ馳せ重なる事、ただ櫛の歯を挽くがごとし。

26 多くの僧徒による僉議。「僉議」は一同で相談すること。
27 底本「次帝」。他本により改める。
28 底本「そんゑ」。「尊意」が正しい。尊意は第十三代天台座主。
29 菅丞相。菅原道真（424頁注3参照）。尊意の法力によって、道真の悪霊は鎮められたという。
30 惟喬親王。
31 現京都市左京区。旧愛宕郡小野郷。

「すでに御方こそ、四番続けて負けぬれば」

と申しければ、恵亮、心憂く思はれ、絵像の大威徳を逆様に掛け奉り、三尺の土牛を取つて、北向きに立て、行はれけるに、土牛踊りて西向きになれば、南に取つて押し向け、東向きになれば、西に押しなをし、肝胆を砕きて揉まれしが、なを居かねて、独鈷をもつて、みづから脳を突き砕きて、脳をとり、罌粟に混ぜ、炉壇にうちくべ、黒煙をたて、一揉み揉まれ給ひしかば、土牛猛りて声を上げてげれば、絵像の大威徳は、利剣を捧げて振り給ひければ、所願成就してげりと、御心をのべ給ふところに、

「御方こそ、六番続けて勝ち給ひ候へ」

と、御使ひ走りつきければ、喜悦の眉を開き、急ぎ壇をぞ降りられける。ありがたき瑞相なり。されば、惟仁親王、御位に定まり、東宮に立たせ給ひけり。しかるに、延暦寺の大衆の僉議にも、

「恵亮脳を砕きしかば、次弟位につき、尊意利剣を振り給へば、菅丞霊を垂れ給ふ」

とぞ申しける。これによつて、惟喬の御持僧真済僧正は、思ひ死ににぞ失せ給ひける。御子も、都へ御帰りなくして、比叡山の麓、小野といふ所に閉ぢ籠もらせ給ひけり。頃は神無月末、雪げの空の嵐にさえ、時雨

1 惟喬・惟仁、右近の馬場へ御幸。